

高校生の英語における基本的欲求充足尺度の作成の予備調査 －内発的動機づけに及ぼす影響－

染 谷 藤 重*

(令和元年8月30日受付；令和元年12月2日受理)

要 旨

本研究の目的は、高校生の英語の授業における基本的心理欲求の尺度開発を行うことであった。さらに、英語授業への欲求充足が、英語学習における内発的動機づけに及ぼすどのような影響を及ぼすかの予備調査を行うことである。また、作成した尺度の関連性についても検証を行うことである。参加者は、高等学校1年生から3年生の合計201名であった。調査の方法としては、基本的欲求理論に基づく、3欲求の充足のアンケートを作成し、実施、分析を行った。確認的因子分析(CFA)及び信頼性係数の分析の結果、今回作成した3つの欲求充足尺度の信頼性を担保することができた。そこで、3欲求の充足が内発的動機づけにどのような影響を及ぼしているかを検討するために、共分散構造モデリングによるパス解析(SEM)を行った。その結果、受け入れることができる適合度を得た。この研究から、自己決定理論の枠組みのもと、高校生の英語授業動機づけが、内発的動機づけに影響を及ぼすことが明らかとなった。したがって、今後、これらの結果発展させ、教育における動機づけ研究に貢献していきたい。

KEY WORDS

Motivation：動機づけ Self-Determination Theory：自己決定理論 High School Students：高校生
尺度開発：Scale development Preliminary Survey：予備調査

1 はじめに

『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 外国語編 英語編』(文部科学省, 2018)によれば外国語科の目標は、「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、(1)各学校段階の学びを接続させるとともに、(2)「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実を図っている(文部科学省, 2018)。

高等学校外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと, 読むこと, 話すこと, 書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。」とされており、「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」のそれぞれに関わる外国語特有の資質・能力を育成する必要がある(文部科学省, 2018)と明記されている。ここでの学びに向かう力を育成する上で生徒の動機づけは重要な役割を果たすと考えられる。従って、本研究では、高校生の英語授業動機づけ尺度の作成を行い、それらが、英語学習への内発的動機づけにどのような影響を及ぼすかについて検討する。

2 先行研究

2.1 動機づけ

教育心理学観点から、市川(1995)は、動機づけ(motivation)とは、「学習意欲」とか「やる気」と言われ、学習に限らず、行動を方向付ける基本的な欲求のことであると述べている。また、鹿毛(2013)は、動機づけとは、「行為が起こり、活性化され、維持され、方向づけられ、終結する現象」(p. 12)と定義している。英語教育における観点からは、廣森(2010, p. 47)は、「特定の行動を生起し、維持する心理的メカニズム」としている。その特徴を3つの視点からとらえると、(1)行動の目標や目的(質的側面)を規定する『動機』(motive)、(2)前者に加え、実際の行動の強さ(量的側面)を規定する『動機づけ』(motivation)、(3)教師の指導や学習者の自己動機づけに

よって、行動の質的・量的側面への介入を志向する『動機づける』(motivate/motivating)である」と言及している。

2. 2 自己決定理論 (Self-Determination Theory: SDT)

自己決定理論とは、成長と統合へと向かう自己の傾向性及びより統合された自己の感覚を発達させていく傾向性を生得的に備えているという生命体論的視座に立った動機づけの考え方である (Ryan & Deci, 2000a, 2000b, 鹿毛, 2013)。Ryan and Deci (2017) によれば、自己決定理論は、6つの下位理論 (認知的評価理論, 有機的統合理論, 因果志向性理論, 基本的欲求理論, 目標内容理論及び関係性動機づけ理論) に分かれており、その理論が各々関連性を持っているとされている。本研究では、高等学校の英語 (外国語) の授業に関する動機づけを規定する「基本的欲求理論」及び英語 (外国語) 学習全般の動機づけを規定する「有機的統合理論」に焦点を置き、研究を進める。

2. 3 基本的心理欲求理論 (Basic Psychological Needs Theory: BPNT)

基本的心理欲求理論とは、「人間の成長, 統合的な発達, well-being (ウェルビーイング) のために必要不可欠な3つの生得的な心理欲求の充足を基盤とした考え方である」(Ryan & Deci, 2017, p.242)。Deci & Ryan (1985) によれば、人間には3つの基本的心理欲求があるとされる。自律性 (Autonomy), 有能感 (Competence), 人との関係性, 他者受容感 (Relatedness) という3つの心理的欲求が満たされると、価値観が「内在化」し、外発的だった動機づけが連続体にそって内発的なものへと移行していくとされている。Reeve (2016) によれば、3欲求の充足が、以下に述べる「内発的動機づけ」の充足に寄与するという見解も得られている。

英語 (外国語) 学習における、3つの欲求充足は、以下の通りである (鹿毛, 2013, p.184; 廣森, 2006, p.13)。

(1) 自律性の欲求 (need for autonomy) の充足

自律性の欲求とは、行為を自ら起こそうという傾向性を指し、学習者が自律的に英語学習に取り組みたいと感ずることを指す。

(2) 有能性の欲求 (need for competence) の充足

有能性の欲求とは、環境と効果的に関わりながら学んでいこうとする傾向性を指し、学習者が英語ができるようになりたい、あるいは英語の授業内容を理解したいと感ずることを指す。

(3) 関係性の欲求 (need for relatedness) の充足

関係性の欲求とは、他者やコミュニティと関わろうとする傾向性を指し、学習者が教師や仲間と、互いに協力的に英語学習に取り組みたいと感ずることを指す。

2. 4 内発的動機づけ

Vallerand (1997) によれば、「内発的動機づけ (Intrinsic Motivation) とは、言語学習において3つに区分されると述べている。その3つとは、「内発的動機づけ知識 (IM-Knowledge)」「内発的動機づけ達成 (IM-Accomplishment)」「内発的動機づけ刺激 (IM-Stimulation)」である。これら3つの下位分類に共通しているのは、自ら始めた挑戦的な課題を行う際に経験する楽しさや満足感を得られる感覚である。近年では、この感覚が、生徒の学習意欲を高め、学習の質や、エンゲージメントを導くとされている。また、Ryan & Deci (2017) によると、内発的動機づけは、Well-being (ウェルビーイング) の構成要素であると述べられている。

2. 5 基本的心理欲求が内発的動機づけを予測するプロセス

以下、Reeve (2016) を基に作成した、基本的心理欲求充足が内発的動機づけを予測するプロセス (図1) に関して記述する。以下、研究の目的で述べるが、本研究では、このモデルを検討することとする。

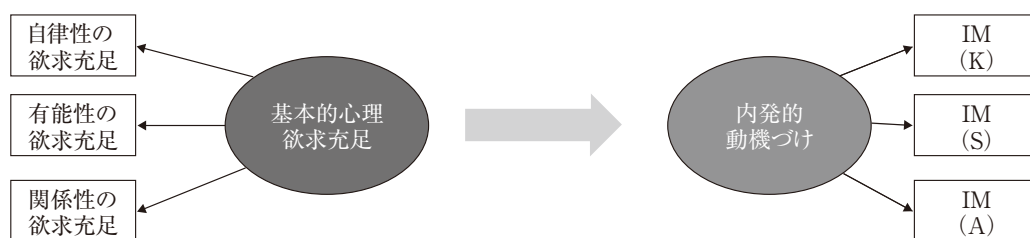


図1 基本的心理欲求充足が内発的動機づけを予測するプロセス

3 研究の目的

本研究の目的は、高校生の英語の授業における基本的心理欲求充足の尺度開発を行うことである。さらに、英語授業への欲求充足が、英語学習における内発的動機づけに及ぼす影響について調査を行うことである。また、作成した尺度の関連性についても検証を行う。

4 研究方法

4.1 参加者

高等学校の1年生78名、2年生83名、3年生40名の計201名であった（男子：111名、女子：90名）。この高等学校の特徴としては、落ち着いた校風と真面目な生徒が多いという点が挙げられる。創立約50年で、いわゆる伝統校ではないが、県内の中堅校として位置づけられている。周辺地域は駅から離れた閑静な住宅街であり、それも学校の雰囲気に影響を及ぼしていると考えられる。この学校の生徒は、概して素直かつ温厚である。生徒の約9割が大学進学を目指しているが、いわゆる難関校を志望する生徒は少なく、推薦入試受験の利用が目立つ。生徒指導上の問題は少なく、教科指導や進路指導も生徒のニーズに合ったものとなっている。ひとつ課題を挙げるとすると、生徒の進路志望が多岐にわたり学力格差も比較的大きいことから、どのような教科指導をすべきか生徒の実態を把握しながら常に見直しをする必要がある、ということである。この学校では、コミュニケーション英語Ⅰ～Ⅲ、及び英語表現Ⅰ・Ⅱの授業が行われている。内容としては、4技能統合型のコミュニケーション型授業を受けてきた生徒達である。

4.2 実施時期

本調査は、2019年1月に行われた。倫理的な配慮としては、調査実施前に「思った通りに回答してよいこと」「アンケートは無記名であり、個人特定されないこと」「調査以外の目的で使用しないこと」「成績には一切関係ないこと」を書面、また、口頭で伝えた。

(1) 協力は自由意志に基づくこと本アンケートへの協力は自由意志になるので、途中で回答をやめることができる。また、回答しない場合にも不利益は生じない。

(2) 個人情報の保護に万全をつくすこと

回収したデータは、研究室の鍵のかかる机等で厳重に管理する。また、研究が終了した時点でアンケート用紙はシュレッダーで破棄する。電子データはパスワードを設定したパソコン及びファイルに保存し、研究者以外のアクセスを制限する。学会や学術論文等での研究成果公表段階時においても個人情報として扱うことはしない。

4.3 調査方法

調査には、基本的心理欲求充足を図るために独自に作成したアンケートが用いて行われた。分析対象のアンケート項目は、基本的欲求理論 (Jang, et al., 2016 ; Ryan & Deci, 2017) の枠組みを応用した欲求充足に関する9項目と、内発的動機づけ (Noels, et al., 2003) に関する12項目の計21項目であった。

4.4 分析方法

心理的欲求充足の各項目が各々の因子を適切に反映しているかを検討するために、確認的因子分析 (CFA) を行った。内発的動機づけに関しては、信頼性係数 (α 係数) を算出し、内的整合性を確認した。その結果を基に、共分散構造モデリング (SEM) を用いることとした。

5 結果と考察

5.1 確認的因子分析の結果

確認的因子分析 (CFA) の結果 (図2) からモデル適合度指標を算出した。

$\chi^2 = 53.252$, $df = 24$, $p = .001$, $\chi^2/df = 2.219$, $RMR = .042$, $GFI = .941$, $AGFI = .890$, $CFI = .973$, $RMSEA[90\%CI] = .078[.050, .106]$ と十分な適合度を得ることができた。さ

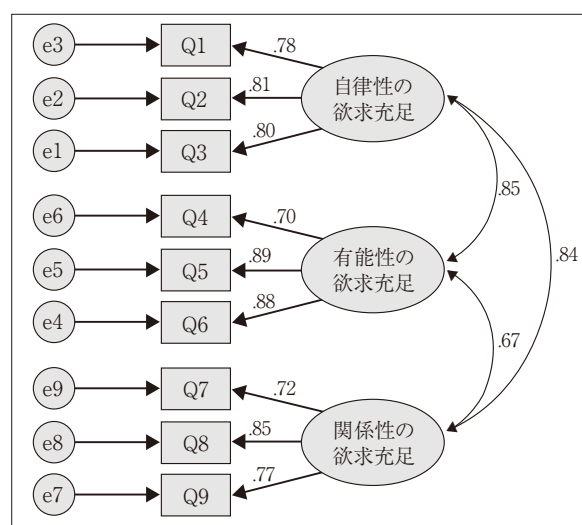


図2 確認的因子分析 (CFA) の結果

らに、信頼性係数 (α) を算出したところ、 $\alpha = .839$ (自律性), $.858$ (有能性), $.818$ (関係性) と十分な数値を示した。従って、これ以降、今回作成した質問項目を用いて分析を行う。

5.2 内発的動機づけの内的整合性の検討

今回使用した内発的動機づけの12項目に関して、3つの下位区分を設定し、それぞれの内的整合性を検討した。クロンバックのアルファ係数 (α 係数) を算出した結果、

- ・内発的動機づけ知識 (IM-Knowledge) : $\alpha = .905$
- ・内発的動機づけ達成 (IM-Accomplishment) : $\alpha = .895$
- ・内発的動機づけ刺激 (IM-Stimulation) : $\alpha = .868$

という、十分に受け入れられる数値を得ることができた。従って、これ以降、この質問項目を分析に使用する。

使用したすべてのアンケート項目の記述統計量を表1に示す。

表1 アンケート項目の記述統計量

質問項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	歪度	尖度
自律性の欲求充足				
英語の授業では、ストレスなく、リラックスして授業を受けることができると思う。	3.67	0.961	-0.517	0.050
英語の授業では、不安がなく自分らしくいられると思う。	3.23	0.994	-0.134	-0.185
英語の授業では、自分が興味関心を持っていることができると思う。	3.29	0.978	-0.153	-0.342
有能性の欲求充足				
英語の授業では、難しい一人で取り組む授業中の課題や協働的な(協力する)作をうまく仕上げられる気がする。	3.30	1.025	-0.345	-0.310
英語の授業では、難しい挑戦でも好んですると思う。	2.99	1.051	-0.022	-0.697
英語の授業では、難しいこともうまくやることができると思う。	2.80	1.096	0.103	-0.699
関係性の欲求充足				
英語の授業では、クラスの人と安心して授業に取り組めると感じる。	3.66	1.018	-0.533	-0.050
英語の授業のカリキュラムは、自分にとって適切だと感じる。	3.56	0.953	-0.320	-0.092
英語の授業で使われている教材・教具は自分にとって取り組みやすいと感じる。	3.50	0.923	-0.147	-0.313
内発的動機づけ(知識)				
英語圏の人達の文化や生活について知識を得るのは楽しいから。	3.49	1.127	-0.383	-0.548
英語圏の情報(本や映画など)について知ることが楽しいから。	3.63	1.084	-0.521	-0.364
英語を通して新しい発見があるのがうれしいから。	3.47	1.109	-0.273	-0.719
どんなことでも新しい知識を得るのは楽しいから。	3.69	1.002	-0.402	-0.387
内発的動機づけ(達成)				
英語がどこまでできる様になるか、挑戦するのが楽しいから。	3.46	1.086	-0.246	-0.698
自分の英語が上達することが楽しいから。	3.68	1.033	-0.400	-0.541
英語の文章が理解できるとうれしいから。	3.89	1.006	-0.721	-0.013
英語の練習問題や発音がうまくできたりするとうれしいから。	3.51	1.078	-0.214	-0.699
内発的動機づけ(刺激)				
英語を理解したり英語で自分の言いたいことが表現できたりするとうれしいから。	3.74	0.950	-0.344	-0.617
英語で話すと心地よいから。	2.95	1.130	0.098	-0.716
英語を聞くことは楽しいから。	2.87	1.088	0.189	-0.524
外国語が話されているのを聞くことは、心地よいから。	2.81	1.142	0.316	-0.627

5.3 モデルの検証

先行研究から得たモデル(図1)を検討するために、IBM SPSS AMOS Ver.25を用いて共分散構造モデリング(SEM)によるパス解析を行った。その結果を図3に示す。

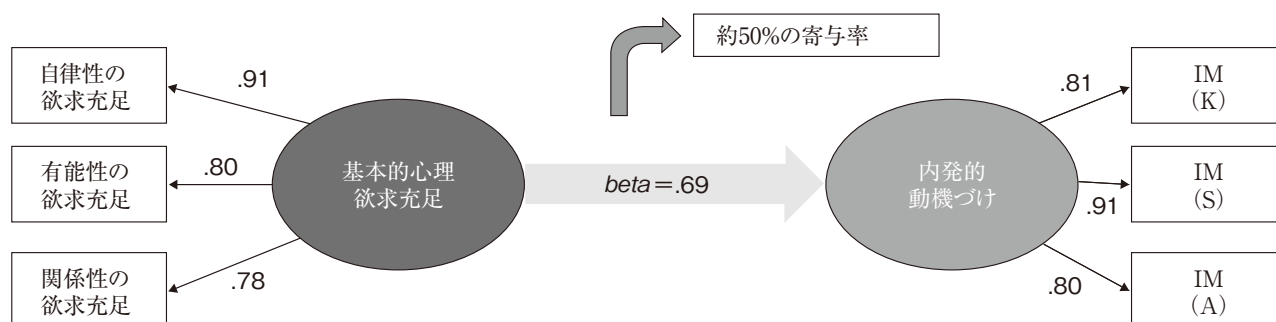


図3 共分散構造モデリングによるパス解析の結果

SEMを行った結果、図3のような数値が得られた。このモデルの、モデル適合度指標は、 $\chi^2=21.443$, $df=8$, $p=.006$, $\chi^2/df=2.680$, $RMR=.030$, $GFI=.965$, $AGFI=.909$, $CFI=.981$, $RMSEA[90\%CI]=.092[.046, .140]$ であった。GFI, AGFI, CFI $>.90$ であるため、十分な適合度が得られているが、 $RMSEA >.05$ となってしまう。よって、このモデルが十分に適切なものであると断言できないが、 $.05 < RMSEA < 1.0$ の範囲内であるため、十分とは言えないが、受け入れられる値であると判断した。

分析の結果から、基本的心理欲求充足の因子を構成する3つの欲求充足及び、内発的動機づけ因子を構成する3つの要因のパス係数が十分大きな値を示していることから、これらの要因がそれぞれの因子を十分に反映していることが分かる。また、「基本的心理欲求充足」から「内発的動機づけ」へのパスが、 $\beta = .69$ と高い数値を示した。この結果から、高等学校における英語の授業における動機づけは、約50%程度、生徒の英語学習への内発的動機づけに影響をおよぼしていることが明らかになった。

5.4 それぞれの因子の関連性

次に、3つの心理欲求充足と、3つの内発的動機づけがそれぞれ、どのような関連性を持っているのかを詳細に検討するために相関係数を算出した(表2)。

表2 相関係数

	自律性の 欲求充足	有能性の 欲求充足	関係性の 欲求充足	内発的動機 づけ(知識)	内発的動機 づけ(達成)	内発的動機 づけ(刺激)
自律性の欲求充足	—					
有能性の欲求充足	.735**	—				
関係性の欲求充足	.702**	.594**	—			
内発的動機づけ(知識)	.407**	.351**	.451**	—		
内発的動機づけ(達成)	.578**	.504**	.569**	.731**	—	
内発的動機づけ(刺激)	.505**	.484**	.457**	.676**	.714**	—

$N=201$, ** $p<.001$

相関係数を算出した結果、「自律性の欲求充足」と「有能性の欲求充足」「関係性の欲求充足」は、強い正の相関を示した($r=.735$, $r=.702$; $p=.000$)。また、「有能性の欲求充足」と「関係性の欲求充足」も中程度の正の相関を示していることから($r=.594$, $p=.000$)、この3つの欲求充足は、それぞれに影響しあっていることが考えられる。したがって、今後の、高等学校における英語の授業を構築する上では、この3つの欲求を同時に満たすような授業構築をするとよいと考えられる。また、内発的動機づけとの関連性についても、3つの欲求充足が、各々の内発的動機づけと中程度の正の相関を示していることから(表1参照)、3欲求の充足が、各々の内発的動機づけと密接に結びついていることが分かる。よって、授業内での3欲求の充足が、内発的動機づけを予測することは、前述で述べたように十分に考えられる。

6 結論

本研究の結果から、基本的欲求理論を基にした高校生の英語授業における3つの欲求充足尺度を作成することができた。また、自律性、有能性、関係性の3つの欲求を満たすことが、内発的動機づけを予測するということも明らかとなった。また、3欲求それぞれと3つの内発的動機づけにも同時に関連性があることが明らかとなった。

本研究は、予備調査ではあったが、高等学校外国語科において、主体的に学ぶ生徒を育成するために重要と考えらる動機づけについて自己決定理論の観点から、明らかにすることができた。この結果を基に、本調査を行い、まだ、未知数である他の理論との関係性を検討することが必要とされるだろう。

謝辞

本研究においては、千葉県高等学校教諭生田裕二先生に、アンケート調査に協力いただき心より感謝を申し上げます。また、調査に参加していただいた生徒の皆様には感謝いたします。論文執筆に関して、様々なご助言を頂きました。千葉大学教育学部教授の本田勝久先生に感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) 市川伸一 (1995). 『現代心理学入門 3 学習と教育の心理学』東京：岩波書店.
- 2) 廣森友人 (2006). 『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』多賀出版：東京.
- 3) 廣森友人 (2010). 「第3章 動機づけ研究の観点から見た効果的な英語指導法」小嶋英夫・尾関直子・廣森友人 (編) 『成長する英語学習者 学習者要因と自律学習 (pp. 47-74)』東京：大修館書店.
- 4) 鹿毛雅治 (2013). 『学習意欲の理論 動機づけの教育心理学』東京：金子書房.
- 5) 文部科学省 (2018). 「高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/28/1407073_09_1_1.pdf
- 6) Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination theory*. New York, NY: Plenum Press.
- 7) Jang, H., Kim, E. J., & Reeve, J. (2016). Why students become more engaged or more disengaged during the semester: A self-determination theory dual-process model. *Learning and Instruction, 43*, 27-38.
- 8) Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clement, R. & Vallerand, R. J. (2000). Why are you learning a second language? Motivational orientations and Self-determination theory, *Language Learning, 50*(1), 57-85.
- 9) Reeve, J. (2018). *Understanding motivation and emotion* (7th edition). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- 10) Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000a). Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology, 25*, 54-67.
- 11) Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000b). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist, 55*, 749-761.
- 12) Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. New York, NY: Guilford Press.
- 13) Vallerand, R. J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology, 29*, 271-360. San Diego, CA: Academic Press.

Preliminary Survey of the Development of a Basic Psychological Needs Satisfaction Scale in English Lessons for High School Students —Effects on their Intrinsic Motivation

Fujishige SOMEYA*

ABSTRACT

The purpose of this study was to develop the scale of basic psychological needs satisfaction in high school students' English classes. In addition, a preliminary study was conducted on how needs satisfaction for English classes affects the intrinsic motivation in learning English. It was also necessary to verify the relevance of the developed scale. There were a total of 201 participants, from first to third year high school students. As a method, we developed a questionnaire to fulfill three needs based on basic psychological needs theory and conducted and analyzed it. As a result of the confirmatory factor analysis (CFA) and reliability coefficient analysis, we were able to ensure the reliability of the three basic psychological needs satisfaction scales we developed. Therefore, to examine how the fulfillment of three needs satisfaction affects intrinsic motivation, we performed path analysis using structural equation modeling (SEM). As a result, acceptable fitness was obtained. From this study, it became clear that under the framework of SDT, the motivation of English classes for high school students influences the intrinsic motivation. In the future, I would like to contribute to motivational research in education.

* Humanities and Social Studies Education